

リモートによる感染症医療通訳基礎トレーニングとロールプレイ演習の取り組み  
「HIV検査と医療へのアクセス向上に資する多言語対応モデルの構築に関する研究」班

研究分担者 宮首 弘子 杏林大学外国語学部教授  
                  沢田 貴志 神奈川県勤労者医療生活協同組合港町診療所所長  
研究代表者 北島 勉 杏林大学総合政策学部教授

### 研究要旨

本年度の感染症通訳研修は新型コロナウイルス感染拡大の影響を受けて、感染症通訳研修は例年通りの対面研修が難しくなった。医療現場では、遠隔通訳の需要が高まる一方であるが、遠隔通訳のノウハウを身につけている通訳者が少なく、現役のベテラン医療通訳者からも戸惑いの声が上がった。そこで、感染症通訳研修は本来の目的である HIV や結核の現場通訳者の養成を、対面研修から Zoom によるリモート研修に切り替えることで、感染症通訳者の養成と遠隔通訳者の養成が同時進行する取り組みを模索した。その結果、リモートによる感染症通訳研修は、実行可能あり、一石二鳥の効果も得られると手ごたえを感じた。研修を通して、遠隔通訳ならではのメリットを実感することができただけでなく、デメリットをカバーするための工夫の必要性にも気づかされ、また、工夫次第でリモート通訳研修は一定な効果が得られることも分かった。今年度の研修で得られた経験は、今後のリモートによる感染症通訳研修のモデル作りの価値ある参考となった。

Zoom によるリモート感染症通訳研修は、本年度も大阪 CHARM と多言語リソースかながわ（以下 MIC かながわ）に業務委託し、それぞれ4回にわたり実施した。大阪 CHARM 主催の研修では、参加者は大阪、京都、兵庫県など近畿圏から4回合計で75名であるのに対し、MIC かながわ主催の研修では、参加者はこれまで首都圏や東北地方を中心であったが、今年度はさらに北海道から九州まで参加者が集まり、4回合計308人の参加が得られた。人数制限のあるロールプレイ演習を除く各3回は聴講者を含めて100名を超えるものとなった。遠距離でも簡単に参加できるというリモート研修ならではのメリットが顕著に表れたと考える。

本研修は4回にわたり実施、内容は大きく2つの部分から構成される。具体的には、HIV や結核に加え、本年度は新型コロナウイルスに関する医療知識を盛り込んだ各種の座学と、通訳スキルアップに必要なトレーニング法及びロールプレイ演習などの参加型研修に分けられる。本報告は後者に関する報告である。

本報告の扱う研修の主な内容は、通訳スキルアップに有効な通訳基礎トレーニング法の紹介と演習、HIV や結核の医療現場を想定したロールプレイ通訳演習である。通訳技法の紹介は、系統的に通訳訓練を受けておらず、現場経験も不十分な参加者が多いことを踏まえて、各種通訳トレーニング法を演習の形で紹介し、自宅でも簡単に自主トレーニングできることを体験してもらい、日々の自主学習につながることを目的としている。ロールプレイ通訳演習は、遠隔医療現場さながらの緊張感を模擬体験してもらい、一人一人の通訳パフォーマンスを具体的に評価することで、総合的に通訳力と対応力の向上を図るものである。

さらに研修終了後に、通訳基礎トレーニング法とロールプレイ演習についてそれぞれアンケートを実施し、参加者の回答から研修の効果を確認し、今後の改善点を洗い出した。

## A. 研究目的

この数年は訪日外国人が増加の一方を辿り、インバウンドの需要に沸いたと言える。同時に、少子高齢化に伴い、労働人口の減少に技能実習生をはじめとする外国人労働者も増える一方である。

しかし、令和2年1月から新型コロナウイルスが中国の武漢で広がり、あっという間に世界規模でパンデミックを起こしたため、地域や国を跨る人的交流がストップせざるを得ない状況に陥った。それゆえ令和2年の訪日外国人の数は、前年比マイナス87.1%を記録した<sup>1)</sup>。渡航を控えた留学生や技能実習生までも来日できない状態が続いている。

新型コロナウイルス感染拡大が止まらない中、病院や保健所などの医療機関はコロナ対応に追われ、外国人のコロナ感染が危惧されつつも、迅速な対応策が難しい。コロナ下のHIV検査とりわけ外国人のHIV検査はより厳しい状況にならざるを得ないと思われる。

一方では、コロナウイルス感染拡大に伴い、医療現場での通訳需要はむしろ高まった。感染を防ぐために、病院に出向いて通訳するのではなく、電話やタブレットを使って、またはZoomを利用した遠隔通訳のケースがどんどん増えた。しかし、現役の医療通訳者でも、必ずしも遠隔通訳を経験しておらず、遠隔通訳に必要なツールの操作も把握していない。ただでさえ難しい医療通訳が、経験したことのない遠隔通訳を行うのに戸惑いの声が多く聞かれた。設備の問題から、操作するノウハウの不足、対面と異なる対応の難しさなど、現場の医療通訳者にとっては、遠隔通訳のスキルをいち早く身につけるのが急務となった。

このような前例のない、且つ先の見えない状況下で、本研究班はコロナ下でもできること、コロナ下だからこそすべきことを考え、実行することにした。高まる遠隔通訳のニーズに研究班にできることとは、リモートによる感染症通訳研修を実施することで、遠隔通訳研修のノウハウを開発し、通訳者にそのノウハウを体験し、理解してもらい、現場に出る自信をつけてあげることだという結

論に至った。

こうした点に鑑み、当研究班はHIVと結核双方に対応できる各種言語の感染症医療通訳者の育成を目的とし、ロールプレイ通訳研修のモデル化に取り組んできた。今年度はこれまで概成した研修モデルをベースに、さらに新型コロナウイルスに関する知識や遠隔通訳に必要なスキルの演習を加えて、プログラムを作り直し、医療現場のニーズに対応できる研修モデルの構築を図った。

## B. 研究方法

### 1. 研修の流れ

令和2年度の通訳技術研修は、昨年度に引き続き<sup>2)</sup>、横浜市を拠点とするNPO「MIC かながわ」と大阪市を拠点とするNPO「大阪 CHARM」に依頼して、東京エリアと大阪エリアの二組の研修を行った。

各組の通訳技術の研修は、通訳基礎トレーニング演習とロールプレイ演習の2部構成である。

実施日時は次のとおりである。

○大阪エリア（主催：大阪 CHARM）

・1部：通訳基礎トレーニング演習

2020年9月5日 13:00～17:00

・2部：ロールプレイ演習：

2020年10月3日 9:30～17:00

○東京エリア（主催：MIC かながわ）

・1部：通訳基礎トレーニング演習

2021年2月6日 13:00～16:30

・2部：ロールプレイ演習

2021年2月20日 10:30～17:00

本年度の特筆すべき点は、コロナ禍での実施のため、完全にリモートでインターネットを通しての実施としたことである。そのため、特にMIC かながわでは、研修者の募集範囲を全国に広げて募集した。

今年度の研修で各組に共通する項目・内容と流れは、表1のとおりである。

表 1. 研修の流れ

	項目	内容	実施方法
1部	医療通訳の心得講義	・遠隔通訳の心得とノウハウ	・Zoomによるリモート一斉講義
	医療通訳技術の講義	・クイックレスポンスの練習法	・Zoomによるリモート一斉講義
		・シャドーイングの練習法	・Zoomによるリモート一斉講義
		・リプロダクションの練習法	・Zoomによるリモート一斉講義
		・記憶とメモテーク法	・Zoomによるリモート一斉講義
	通訳基礎トレーニング演習	・HIV・結核専門用語のクイックレスポンス練習	・Zoom Breakout Roomsによるリモートグループワーク
		・HIV・結核の関連文のシャドーイング練習	・Zoom Breakout Roomsによるリモートグループワーク
		・HIV・結核の関連文のリプロダクション練習	・Zoom Breakout Roomsによるリモートグループワーク
	・メモテークと穴埋め練習	・Zoom Breakout Roomsによるリモートグループワーク	
	成果アンケート（1部）	・研修成果自己確認	・Google Formを通したアンケート配信と回答集計
2部	ロールプレイ演習（1回目）	・通訳心得の寸劇によるプレゼンテーション	・Zoomによるリモート一斉講義
		・各参加者ロールプレイ実演と指導1	・Zoom Breakout Roomsによるリモートグループワーク
		・実演の録画1	・Zoomによる録画
		・参加者相互の実演見学1	・Zoom Breakout Roomsによるリモートグループワーク
	ロールプレイ演習（2回目）	・ロールプレイ実演と指導2	・Zoom Breakout Roomsによるリモートグループワーク
		・実演の録画2	・Zoomによる録画
		・参加者相互の実演見学2	・Zoom Breakout Roomsによるリモートグループワーク
	録画フィードバック（2部）	・ロールプレイ実演の自己確認	・Zoomによる録画配信
	成果アンケート（2部）	・研修成果自己確認	・Google Formを通したアンケート配信と回答集計

## 2. 通訳基礎技術と遠隔通訳のノウハウに関する演習

1部の通訳基礎トレーニング演習は、通訳に必要なスキルを如何に身につけ、なおかつ日々向上していくかの方法論を紹介して、演習を通して習得してもらうのが狙いである。

研修の内容は、

- (1) 医師の視点から見る医療通訳者に必要な心得講義
- (2) 医療通訳者を養成する観点から通訳スキルを向上するための方法論の講義と演習の構成である。

(1)では研究班の沢田が医師の立場から、「医療通訳のこれから 遠隔通訳の活用を考える」と題して、コロナ禍において医療通訳に求めるスキルとは何かを教えるものである。医療現場での遠隔通訳への需要の高まり、遠隔通訳の種類、遠隔通訳の長所と短所、遠隔通訳ならではの注意点について、沢田医師本人および現場の医療通訳者の生の体験を踏まえて紹介しつつ、ケーススタディの形で遠隔通訳の難しさと工夫すべきところ（ノウハウ）を理解してもらった。

(2)では、宮首が通訳者養成の観点から各種通訳

基礎トレーニング法の講義と演習である。ボランティア通訳者の多くが通訳訓練を十分に受けていないことを踏まえて、基礎となるシャドーイング、リプロダクション、クイックレスポンス、ノートテークなどのトレーニング方法が如何に日頃自宅で取り込むかを、HIVや結核の専門用語やフレーズの音声ファイルを用いて練習し、訓練法を体得してもらう。さらに、Zoomのブレイクアウトルーム機能を使って、通訳言語ごとにグループ学習を行い、自宅でも自分一人でも手軽に練習して、通訳のスキルアップができることを体感してもらうものである。

## 3. ロールプレイ通訳演習

2部のロールプレイ演習は、現場経験のないもしくは不十分な参加者に現場を模擬体験することによって、自身の通訳能力や現場対応力の確認と向上を目的としている。

今年度は遠隔通訳現場の再現を意識して、医療者役と患者役は研修主催側が用意した会議室で対面によるロールプレイを行い、研修参加者は医療通訳者として、Zoomを通して遠隔通訳を行う形でロールプレイ通訳演習を進めた。

ロールプレイの教材は、昨年度同様に、NPO「MIC かながわ」作成のロールプレイの次の3つのシナリオを利用した。

シナリオ H①：医師が患者に HIV 感染を告知する場面

シナリオ H②：医師が HIV 患者に治療法を説明する場面

シナリオ K①：排菌している結核患者に保健師が初回面接を行う場面

参加者には事前情報として、結核と HIV に関するロールプレイという設定と関連する専門用語を1週間前に知らせて、クイックレスポンスなどの自主学習をして、事前準備をしてもらった。医療者役と患者役は「MIC かながわ」や「大阪 CHARM」のベテラン医療通訳者に依頼し、現場の雰囲気を醸成した。

実施に当たっては、少人数の相互効果を勘案し、言語別少人数での実施とした。大阪 CHARM は現場ニーズの多い中国語、フィリピン語、ネパール語の3言語を選び実施し、8名がロールプレイ演習に参加し、16名が見学した。MIC かながわは中国語、ベトナム語、ネパール語の3言語を実施し、全体で28名が（中国語18、ネパール語2、ベトナム語8）参加した。言語別ロールプレイ通訳演習は、1グループは7名を上限とし、参加者全員が2回ずつ通訳するチャンスが与えられるよう人数制限を行った。

実施の流れとしては、一つのシナリオを前半と後半にわけて（MICの中国語グループは人数が多いため、3等分に分ける）、一つのシナリオを参加者2人ないし3人で通訳する形をとって進めた。各参加者は同じシナリオを二回通訳するように設定し、1回目よりも2回目が改善できたかを実感してもらうねらいである。

Zoomには録画機能が備えているため、参加者に事前に意思確認をし、同意を得たうえでロールプレイ通訳演習を録画した。研修終了後に録画のURLを該当参加者に提供し、各自の振り返り勉強に使ってもらうように設定した。

## 4. 評価方法

研修成果の確認のため、研修参加者に対し、研修に関するアンケート調査（別紙1、2）を実施した。アンケートは半構造的質問形式で、有効性の程度の評価と自由所感を収集した。本年度はオンラインによるアンケート配信と集計を図ったため、研修当日ではなく、後日のアンケート集計となった。

ロールプレイ演習では、通訳に求められる基本的能力を正確性と迅速性の両軸から捉える評価法を採用している。今年度はリモートでの実施であることから、実行可能性を優先し、評価を簡略化した。

通訳の正確性を測るためには、評価ポイントを数値化し、できなかったところを減点する、という簡便な減点方式を採用した。各言語、各グループの指導スタッフはこの統一した評価シートを用いて、参加者の通訳パフォーマンスを採点しながら、具体的に問題点を指摘し、改善の方法をアドバイスする。

通訳の迅速性を測るためには、タイムキーパーを設けて、1回目と2回目それぞれ通訳の所要時間を測り、秒数まで測定して記録することにした。通訳の所要時間を測ることによって、1回目と2回目どれほど時間短縮できたかを可視化し、数値化されたプロセスを通じて、参加者に目に見える研修成果を実感してもらうのが狙いである。

（倫理面への配慮）

すべてのアンケート調査は、当研究班代表者が所属する杏林大学大学院国際協力研究科の研究倫理委員会から承認を得ている。また、ロールプレイの録画への参加は任意であることを事前に説明し、調査参加の同意を得て実施した。

## C. 研究成果

### 1. 研修参加者の属性

研修参加者の属性は、国際交流協会やNPOな

どに所属する現役の医療通訳者が最も多く、医療通訳コーディネーターや医療通訳希望者の参加も見られた。研修者数は東京エリアが1部91人、2部ロールプレイ演習27人、大阪エリアは1部・通訳基礎演習23人(複数言語の登録あり)、2部・ロールプレイ演習8人だった(表2)。

1部・通訳基礎演習の参加者の通訳言語は、大阪エリアの研修では、英語、中国語、スペイン語の他、ネパール語、ベトナム語、フィリピン語、ビサヤ語、インドネシア語、ミャンマー語、マレー語のアジア言語の全10言語(複数言語の登録あり)であった。東京エリアの研修では、英語、中国語、スペイン語、ポルトガル語、フランス語、ロシア語の他、ベトナム語、ネパール語、韓国語、タイ語、モンゴル語などのアジア言語、合計11言語であった(複数言語の登録あり)。

2部・ロールプレイ演習の参加者の通訳言語は、大阪エリアの研修では、中国語2人、ネパール語4人、フィリピン語2人であった。東京エリアの研修では、中国語17人、ネパール語2人、ベトナム語8人であった。

表2. 言語別研修参加者

	東京		大阪		合計
	1部 通訳基礎	2部 ロール プレイ	1部 通訳基礎	2部 ロール プレイ	
参加言語	91	28	23	8	150
英語	33		12		45
中国語	26	18	3	2	49
ベトナム語	8	8	2		18
ネパール語	3	2	4	4	13
スペイン語	6		1		7
ポルトガル語	5				5
タイ語	4				4
フィリピン語			2	2	4
ミャンマー語			2		2
ロシア語	2				2
韓国語	2				2
フランス語	1				1
モンゴル語	1				1
インドネシア語			1		1
マレー語			1		1
ビサヤ語			1		1

## 2. 通訳基礎トレーニング演習の成果

### (1) 通訳技法に対する認識

研修後のアンケートを通して、通訳基礎トレーニングにおける通訳技法の講義と演習によって研修参加者の通訳技法の認識が前進したかどうかを確認した(表3)。

本年度はオンラインによるアンケート配信と集計を図ったため、研修当日ではなく、後日のアンケート集計となった。その結果、集計数は東京エリア N=65 (回収率 71.4%)、大阪エリア N=22 (回収率 95.7%) であった。

「通訳技法を知っていたか」は、参加者の約40%が「知らない」「聞いたことがある」であった。それゆえ「通訳技法の理解が深まったか」に対して、「強くそう思う」「そう思う」が約90%の回答であった。

「シャドーイング」等の各通訳技法の有効性については、東京エリア、大阪エリアともに「強くそう思う」「そう思う」が80%超であり、研修効果が認められる。

表3. 通訳基礎演習の有効性

属性	分類	東京 N=65		大阪 N=22	
		人数	割合%	人数	割合%
通訳技法を知っていたか	a.知らない	9	13.8	4	18.2
	b.聞いたことがある	19	29.2	5	22.7
	c.多少練習したことある	29	44.6	8	36.4
	d.よく練習している	7	10.8	3	13.6
	e.その他	1	1.5	2	9.1
通訳技法の理解の深まり	a.強くそう思う	26	40.0	8	36.4
	b.そう思う	31	47.7	12	54.5
	c.どちらかといえばそう思う	5	7.7	2	9.1
	d.どちらかといえばそう思わない	3	4.6	0	0.0
	e.まったく思わない	0	0.0	0	0.0
シャドーイングの有効性	a.強くそう思う	43	66.2	9	40.9
	b.そう思う	15	23.1	10	45.5
	c.どちらかといえばそう思う	7	10.8	3	13.6
	d.どちらかといえばそう思わない	0	0.0	0	0.0
	e.まったく思わない	0	0.0	0	0.0
クイックレスポンスの有効性	a.強くそう思う	44	67.7	13	59.1
	b.そう思う	16	24.6	6	27.3
	c.どちらかといえばそう思う	5	7.7	3	13.6
	d.どちらかといえばそう思わない	0	0.0	0	0.0
	e.まったく思わない	0	0.0	0	0.0
リプロダクションの有効性	a.強くそう思う	44	67.7	12	54.5
	b.そう思う	15	23.1	7	31.8
	c.どちらかといえばそう思う	5	7.7	3	13.6
	d.どちらかといえばそう思わない	1	1.5	0	0.0
	e.まったく思わない	0	0.0	0	0.0
ノートテキングの有効性	a.強くそう思う	48	73.8	15	68.2
	b.そう思う	12	18.5	4	18.2
	c.どちらかといえばそう思う	5	7.7	3	13.6
	d.どちらかといえばそう思わない	0	0.0	0	0.0
	e.まったく思わない	0	0.0	0	0.0

### (2) リモートによる演習の効果

本年度初めての試みであるリモートによる演習の有効性を研修後アンケートで確認した(表

4)。

研修参加者からは、東京エリア、大阪エリアとも「とても効果的」「効果的」とする評価を50～70%超で得られた。「変わらない」を加えると、8割超がポジティブな評価となった。しかし、「困難」「とても困難」との回答もあり、工夫する余地があることもわかった。

細部について、自由回答による意見をみると(表5)、メリットとして「移動等時間ロス不要」「リラックスして集中しやすい」「遠隔地でも参加可能」などが指摘されている。また少数意見ながら「グループ分けが容易」「チャット機能は便利」などリモートの機能面での肯定的意見もあった。

デメリットとしては、「通信環境不安定」「参加者間の交流困難」「意見交換困難」などである。また、リモートの機能面で「通信機器使い慣れない」「音声の質に難あり」などが指摘された。改善すべき点として「質問困難」が挙げられる。

全体として、リモートによる研修には、まだ改善の余地がある。

表4. リモート実施の評価

属性	分類	東京 N=65		大阪 N=22	
		人数	割合%	人数	割合%
リモート研修の効果 (対面研修に比して)	a.とても効果的	15	23.1	4	18.2
	b.効果的	27	41.5	8	36.4
	c.変わらない	16	24.6	9	40.9
	d.困難	6	9.2	1	4.5
	e.とても困難	1	1.5	0	0.0

表5. リモート実施のメリット・デメリット

	項目	東京 N=65		大阪 N=8	
		人数	割合%	人数	割合%
リモート研修のメリット	移動等時間ロスがない	16	24.6	2	25.0
	リラックスして集中しやすい	14	21.5	1	12.5
	遠隔でも参加可能	11	16.9		
	感染リスクない	5	7.7	1	12.5
	グループ分けが容易	5	7.7	1	12.5
	チャット機能は便利	5	7.7		
	交通費のロスなし	3	4.6	1	12.5
	パソコンで資料確認便利	1	1.5		
	聞く力がつく	1	1.5		
	ミュート機能で個人レッスン便利	1	1.5		
リモート研修のデメリット	通信環境不安定	7	10.8	1	12.5
	参加者間の交流困難	7	10.8		
	意見交換困難	7	10.8		
	通信機器使い慣れない	6	9.2		
	集中力持続困難	6	9.2		
	質問困難	5	7.7	1	12.5
	雰囲気がない	4	6.2		
	雑音等音声の質に難あり	4	6.2		
	講義がステレオ的になる	1	1.5		
	発音者が不明			1	12.5
聞き取り難い			1	12.5	

### 3. ロールプレイ演習の成果

#### (1) ロールプレイの効果

本年度初めての試みであるリモートによるロールプレイ演習の効果、1回目と2回目の実演で比較可能な中国語とネパール語の参加者の実演結果から数値化した(表6)。正確性のパフォーマンス改善率は東京エリア(N=19)で0.47、大阪エリア(N=6)で0.61である。迅速性の改善率は東京エリア(N=19)で0.19、大阪エリア(N=6)で0.22である。(昨年度が正確性改善率0.24、迅速性改善率0.30)

本年度のリモートによる演習実施であるが、昨年度との比較からは昨年度並みの研修効果があったものとみなすことができる。

表6. ロールプレイ実演結果

エリア	参加者	通訳語	実施シナリオ	1回目 減点(A)	2回目 減点(B)	正確性 改善率 (A-B)/A	1回目	2回目	迅速性 改善率 (C-D)/C
							所要時間 (C)	所要時間 (D)	
東京 N=19	1	中国語	KO前	2	2	0.00	6'43"	6'02"	0.10
	2	中国語	HO前	2	2	0.00	4'37"	3'29"	0.25
	3	中国語	KO中	3	0	1.00	7'52"	6'41"	0.15
	4	中国語	HO中	6	4	0.33	4'03"	3'22"	0.17
	5	中国語	HO前	2	1	0.50	4'28"	3'30"	0.00
	6	中国語	HO中	6	2	0.67	5'37"	5'11"	0.08
	7	中国語	HO中	5	2	0.60	4'46"	4'35"	0.04
	8	中国語	HO前	2	2	0.00	4'05"	4'46"	-0.17
	9	中国語	KO前	5	1	0.80	6'49"	5'35"	0.18
	10	中国語	HO前	6	0	1.00	4'15"	2'52"	0.38
	11	中国語	HO前	2	1	0.50	5'13"	3'58"	0.24
	12	中国語	KO前	6	5	0.17	14'01"	12'18"	0.12
	13	中国語	HO中	2	1	0.50	4'11"	3'08"	0.27
	14	中国語	KO後	9	5	0.44	11'06"	9'58"	0.10
	15	中国語	HO前	5	4	0.20	7'23"	5'02"	0.32
	16	中国語	HO中	4	2	0.50	4'20"	4'02"	0.07
	17	中国語	HO中	4	3	0.25	6'51"	5'20"	0.22
	18	ネパール語	KO後	8	5	0.38	23'52"	11'14"	0.58
	19	ネパール語	KO後	7	0	1.00	23'10"	7'45"	0.67
平均						0.47			0.19
大阪 N=6	1	中国語	KO前	5	2	0.60	10'35"	7'52"	0.26
	2	中国語	KO後	12	8	0.33	10'50"	9'11"	0.15
	3	ネパール語	KO前	7	1	0.86	5'01"	3'37"	0.28
	4	ネパール語	KO後	10	2	0.80	7'17"	4'02"	0.46
	5	ネパール語	KO前	12	3	0.75	10'28"	7'42"	0.23
	6	ネパール語	KO後	12	8	0.33	5'36"	5'43"	-0.02
平均						0.61			0.22

研修後のアンケートを通して、ロールプレイの効果、研修参加者がどのように認識したかを確認した(表7)。

通訳本年度はオンラインによるアンケート配信と集計を図ったため、研修当日ではなく、後日のアンケート集計となった。その結果、集計数は東京エリアN=21(回収率75%)、大阪エリアN=26(見学者18人含む回収率100%)であった。

「研修の流れ」「他参加者の実演を参考」は、東京・大阪エリアの研修参加者から、ともに90%以

上の「とてもよい」「良い」評価を受けた。またほとんどのその他の属性についても「良い」以上が60%~90%の高い評価である。

ただし「メモ取り要領の向上」については40~50%の「良い」以上の評価であり、評価が分散した。理由としてはリモートではメモ取り要領の画面が十分に確認できなかったことが考えられる。

表7. ロールプレイ演習の効果

属性	分類	東京 N=21		大阪 N=26	
		人数	割合%	人数	割合%
研修の流れ	a.とても良い	13	61.9	16	61.5
	b.良い	8	38.1	8	30.8
	c.普通	0	0.0	2	7.7
	d.悪い	0	0.0	0	0.0
	e.とても悪い	0	0.0	0	0.0
専門用語の理解の深まり (1回目に対する2回目)	a.強く思う	6	28.6	5	19.2
	b.そう思う	11	52.4	17	65.4
	c.どちらかといえばそう思う	3	14.3	3	11.5
	d.どちらかといえばそう思わない	1	4.8	1	3.8
	e.まったく思わない	0	0.0	0	0.0
患者対応能力の向上 (1回目に対する2回目)	a.強く思う	3	14.3	5	19.2
	b.そう思う	12	57.1	13	50.0
	c.どちらかといえばそう思う	6	28.6	3	11.5
	d.どちらかといえばそう思わない	0	0.0	5	19.2
	e.まったく思わない	0	0.0	0	0.0
医療者対応能力の向上 (1回目に対する2回目)	a.強く思う	3	14.3	4	15.4
	b.そう思う	13	61.9	12	46.2
	c.どちらかといえばそう思う	5	23.8	6	23.1
	d.どちらかといえばそう思わない	0	0.0	4	15.4
	e.まったく思わない	0	0.0	0	0.0
メモ取り要領の向上 (1回目に対する2回目)	a.強く思う	1	4.8	3	11.5
	b.そう思う	11	52.4	9	34.6
	c.どちらかといえばそう思う	7	33.3	7	26.9
	d.どちらかといえばそう思わない	1	4.8	6	23.1
	e.まったく思わない	1	4.8	1	3.8
他参加者の実演を参考	a.強く思う	7	33.3	14	53.8
	b.そう思う	13	61.9	10	38.5
	c.どちらかといえばそう思う	1	4.8	2	7.7
	d.どちらかといえばそう思わない	0	0.0	0	0.0
	e.まったく思わない	0	0.0	0	0.0

(2) リモートによる演習の効果

本年度初めての試みであるリモートによるロールプレイ演習の有効性を、研修参加者への研修後アンケートで確認した(表8)。

研修参加者からは、東京・大阪エリアとも「とても効果的」「効果的」とする評価は30~40%で、「変わらない」を含めると6割超がポジティブな評価をした。一方では、「困難」「とても困難」との回答もあり、改善の余地があることが認められる。

細部について、自由回答による意見(表9)をみると、メリットとして「遠隔地でも参加可能」「移動等時間ロス不要」「リラックスして集中し

やすい」などが指摘されている。これは1部の通訳基礎演習に共通する意見である。また「リラックス・集中できる」「録画機能は有効」などリモートの機能面での肯定的意見もあった。

デメリットとしては、「通信環境不安定」「参加者間の交流困難」「意見交換困難」などである。また、リモートの機能面で「通信機器使い慣れない」などが指摘された。改善すべき点として「表情等の情報入手困難」「臨場感・緊張感低い」「ニュアンス伝達困難」等が挙げられる。

全体として、リモートによるロールプレイ演習については、改善の余地が多いことが判明した。

表8. ロールプレイ演習のリモート実施の評価

属性	分類	東京 N=21		大阪 N=26	
		人数	割合%	人数	割合%
リモート通訳のロールプレイ (対面通訳に比して)	a.とても効果的	1	4.8	2	7.7
	b.効果的	6	28.6	9	34.6
	c.変わらない	7	33.3	7	26.9
	d.困難	7	33.3	8	30.8
	e.とても困難	0	0.0	0	0.0

表9. リモート実施のロールプレイのメリット・デメリット

	項目	東京 N=21		大阪 N=26	
		人数	割合%	人数	割合%
リモート研修のメリット	遠隔でも参加可能	6	28.6	8	30.8
	移動等時間ロスがない	4	19.0	6	23.1
	リラックスして集中しやすい	4	19.0	1	3.8
	感染リスクない	2	9.5	1	3.8
	音声聞き取り容易	1	4.8		
	録画機能有効	1	4.8		
	リモート経験有意義			4	15.4
リモート研修のデメリット	表情等の情報入手困難	5	23.8	8	30.8
	臨場感・緊張感低い	5	23.8	1	3.8
	参加者の交流困難	3	14.3		
	区切りのタイミング困難	2	9.5	1	3.8
	通信環境不安定			8	30.8
	経験ないと困難			2	7.7
	ニュアンス伝達困難			2	7.7
	通信機器使い慣れない			2	7.7
対面の安心感なし			1	3.8	
声が小さいと不適			1	3.8	

## D. 考察

### 1. リモートによる通訳技法習得の模索

令和2年度の研修はコロナ下での実施のため、これまでの対面からZoomによるリモート実施を余儀なくされ、多言語大人数の通訳トレーニングの実施は果たして可能か、不安を抱えての取り組みであった。しかし、リモートによる実施に切り替えたことは、これまで2日間の対面研修を4回に分けて実施することが可能となり、結果的に通訳技法の研修日数を1日分多く取れることになり、より充実した研修が可能となった。

沢田医師による遠隔通訳の活用については、コロナ下の医療現場でいかに遠隔通訳を活用しているかを、具体例をZoom上で実演して見せたうえで、遠隔通訳のメリットとデメリットを参加者とともに考え、とりわけ誤解しやすいシチュエーションや同音異義の語彙などをどう防ぐかを問題提起して、理解を深めることができた。

通訳技法の習得については、参加者個人が自宅で取り組める訓練法の習得を目的としているので、説明は簡単に止めて、演習を通して、やり方を覚えてもらうことにポイントを置いた。しかし、遠隔での実施に加えて、10言語/11言語大人数（CHARMは参加者が23名、MICかながわは91名、見学者を含めて100名超えた）の研修は、いかに効果的に行えるかは大変困難だと言わざるを得ない。

参加者全員に実際練習する機会を与えるために、Zoomのブレイクアウトルームの機能を使ってグループ学習を行った。MICかながわのスタッフや研修講師である宮首が指導する大学院生にグループ学習のリーダーになってもらい、各種通訳トレーニング法を実例を通して、全員参加の形で練習してもらい、訓練法への理解を深めた。

一方では、91名11言語の参加者を言語別に複数のグループに振り分けるのは、手間のかか

るもので、時間通りに振り分けできないケースもあった。また、参加者がブレイクアウトルームの参加に慣れていないため戸惑いも見受けられた。参加者の満足度を上げるのに、引き続き工夫する必要があると考える。

### 2. リモートによるロールプレイ通訳演習の模索

ロールプレイ研修の項目・内容と流れは、これまでの4年間の実績を踏まえたロールプレイ研修モデルに基づいて設定した。但し、今年度はZoomによる遠隔通訳の形での実施となった。

本研修の目的はこれまでは、HIVや結核という感染症の医療現場を疑似体験することによって、未経験からくる心理的ストレスを軽減し、医療従事者や患者への対応の要領を体感して修得してもらうものである。今年度はさらに遠隔通訳の現場も体験してもらい、遠隔通訳ならではの難しさを理解し、その対応能力の修得という目的を付け加えた。

Zoomによるロールプレイ通訳演習の難しい点は、言語別を同時に進行するためには、対面で行う医療者役と患者役のための複数の部屋の用意と、通訳を務める参加者をZoomのブレイクアウトルームに振り分けして同時進行させることである。CHARMの研修では、言語別時間帯を分けて実施したが、MICかながわの研修では、言語別+ブレイクアウトルーム機能による複数グループの同時進行の形を取った。事前全体の説明と事後の総括を含めて、いずれの言語も3時間半から4時間の長丁場となり、集中力の問われる研修となった。

しかし、事前に心配したブレイクアウトルームのグループ分けがスムーズに行き、音声や回線のトラブルもなく、予定通りのロールプレイ演習が時間内に実施できた。結果から言えば、ロールプレイ通訳演習は、Zoom利用により、受講者の動き（視線など）や通訳メモが把握し難い一方、これまで複数のグループが大部屋でやる様な他のグループの声が混入せず集中できたのはよかったと評価された。

Zoomには自動録画の機能があり、ロールプレ



イ演習は参加者の同意を得て録画し、事後の振り返りに効果的だと考える。MIC かながわの統計によると、事後録画の振り返りの視聴状況は、ネパール語 2 名で 14 回、ベトナム語 8 名で 19 回、中国語 17 名で 72 回。参加者が事後繰り返し録画を見たことが確認できた。参加者からは「家で落ち着いて動画を見て 自分の反省点がいくつかわかりました。」「長い話を 2 回も聞き取れなかった時、もう一度聞くべきです。」「メモの取り方についても、もっと注意したいと思います。」「2 回目の時、メモに気をとれて先生の話をはっきり聞こえていない、間違ったメモを頼って通訳してしまいました。本当にいい勉強になりました。」などのメッセージが寄せられ、録画によるフィードバックの効果が実証されたと考える。

結論として、リモートによるロールプレイ通訳演習は、Zoom 機能を駆使することによって、対面実施に劣らない効果が得られることがわかった。回線トラブルの心配、通訳時のメモや表情が確認しづらいなどデメリットがあるものの、遠隔通訳の体験やノウハウの習得に役立つ、録画による内省がしやすいなどメリットもあり、今後のリモートによるロールプレイ通訳研修のモデルづくりに手ごたえを掴んだと考える。

### 3. リモート研修の長所と短所

長所は何よりも移動する必要がなく、自宅からでも参加できること、地域を跨いで遠く離れた他県の通訳者との交流ができて、新鮮な刺激を受けられることである。例えば、ロールプレイの一つのグループには広島、神戸、大阪の方が集まった。また参加者はパソコンの画面越しでの参加であるため、音声の大きさは自分に合わせて調整可能なので、他の通訳者のパフォーマンスを集中して聞くことができる。さらに、通訳演習は自動録画され、事後の復習に何度でも使用可能である。

短所は、ネット環境に問題が起きる場合があることである。また、文字で書いて欲しいという要望には、対応に手間がかかる。さらに、医療者、患者とのアイコンタクトつまりお互いに表情の

確認しづらい点、通訳者のメモの良し悪しを指導者が確認できない点も挙げられる。

上記のことを総じて考えると、リモートによる通訳研修は遠隔通訳の実践の場でもあり、地域や形態の制限を超えて、研修の可能性を広げたとと言える。一方では、通信回線などハード面とソフト面における改善が求められる。

### E. 結論

今年度の研修は何とんでもリモートによる研修の実施可能性の模索である。2 日間の短期集中型対面研修は、リモートでも可能だろうか、その可能性の探りからのスタートであった。主催を引き受けてくれた CHARM と MIC かながわのスタッフもリモートでの開催は未経験だったため、まず Zoom 使用法の研修を受けるところから始まった。

参加者については、リモートだと、どこでも参加可能で、むしろ範囲を広げることができる。移動する必要がなく、自宅でパソコン、或いはスマホさえあれば、手軽に研修に参加できる、この利便性はリモート研修の大きな強みだと実感した。

研修内容は通訳実技の習得なので、練習や実演は不可欠であるため、リモートでの実施では、練習や演習が全員参加可能かは大きな悩みであった。参加者の満足度を上げるにはさらなる工夫が必要だと考える。

ロールプレイ通訳演習は言語別、グループわけの対面実施が基本で、リモートは無理だろうという声もあったが、コロナ下で遠隔通訳需要から、むしろ遠隔通訳のノウハウを習得する好機と捉えて、リモートによるロールプレイ通訳演習を敢行した。今回の研修の経験はリモートによるロールプレイ通訳研修のモデルづくりに寄与できたと考える。

### 参考文献

- 1) 日本政府観光局(JNTO) 報道発表資料  
[https://www.jnto.go.jp/jpn/statistics/data\\_info\\_listing/pdf/210120\\_monthly.pdf](https://www.jnto.go.jp/jpn/statistics/data_info_listing/pdf/210120_monthly.pdf)

2) 北島勉、他(2020) 『外国人に対する HIV 検査と医療サービスへのアクセス向上に関する研究』令和 1 年度総括・分担研究報告書 (厚生労働省・科学研究費補助金エイズ対策研究事業)

**F. 健康危険情報**

なし

**G. 研究発表**

なし

**H. 知的財産権の出願・登録状況**

1. 特許取得

なし

2. 実用新案登録

なし

3. その他

なし